

武田さんを偲ぶ

遠藤健郎

大正12年の関東大地震のとき、僕の家は新宿町の海岸にあった。周囲の漁師の家の人達が、津波が来るぞと騒いでいたことを思いだす。

その後少し西の新田町に移ったが、此處も海岸で漁師の家が列んだ裏手の薯畠の中に父が建てた。

砂浜の先きは、潮が引くと1キロも干上がる遠浅の海だった、その僕の家の前に新しく武田さんの家が出来た。うしろは漁師の子達が梵天塚と呼んでいた。榎の木の巨木の繋がった、彼等の家の墓石が黒々と列んだ墓地になっていた。私がまだ全く子供の頃のことである。

この度の戦争が終わると、家の前の一直線の白い砂浜に、アスファルトが敷きつめられて国道十四号線が出来、海は埋め立てられて、その先きに港が築かれ、公共建築や工場、巨大な団地の郡が建設された。今日の千葉市役所は、当時の海岸から百米ばかりの海の中に建っている。僕や武田さんは冬以外の春夏秋、この市役所のあたりで泳ぎ、海と共に育ったのである。

やがて、武田さんも僕も、此處から薯や麦の畠を通り、小高い砂丘の道を越えて千葉の街に入り、青いドームの屋根の立派な建物の県庁の前を通って、坂道の上の猪鼻台上の千葉中に、早足で重いカバンを尻にぶつけながら、30分も歩いて通学したのである。

武田さんは僕より一年先輩だったので、連れだって登校した記憶はない。当時一年先輩と云うことは厳然たるもので、外出は制服制帽、顔があえれば停止して帽子のヒサシに手を上げて、つまり拳手の礼をしなければならない。一年先輩でも、家が隣でも連れだって登校し、なあなあの友達にはなれなかった。家があまりに近かったので会えば微笑を交わしただけである。

中学を卒業すると、二人とも房総線の千葉駅から、武田さんは早稲田の史学科に、僕は上野の美術学校の油絵科に汽車通学することになったが、同じ列車の箱に乗り合わせることも多かったが、目が合えば唯微笑を交わすだけで、同じボックスに座って両国までの一時間、なあなあと云う仲間にはならなかった。

二人とも学校を終る頃には戦争があり、兵役、就職、仕事と家はそばでも、全くお会いすることができない年月が過ぎた。

こんな二人が戦後急速頻繁に親しく顔を合わせるような事が起こった。

『加曾利貝塚』事件だった。

僕は千葉市教育委員会の社会教育課長と云うのをやっていた。武田さんは母校の千葉中の先生になっていた。今日ではあの学校は違う名称になっているようだが、私達にとっては何時までも千葉中である。

この私達二人にとっては事件と云いたい、この事件の始まりは、彼が当時の千葉市の街はずれの加曾利の薯畠の中から一片の人骨を掘り起こしたときに始まる。彼がそれを持って、例の淋しげな微笑を浮かべながら、突然、僕の事務机の前に現れたときから始まるのである。

僕の机の前に座って、近頃市長などが千葉市は猪鼻城に城を築いた、鎌倉時代八百年前の千葉氏から始まったなどと騒いでいるが、もっともっと、その昔があるんだよ、と例の淋しげな微笑を浮かべた。

やがて僕は、彼の思い、考え方全く共鳴し、彼と共にあの広々とした薯畠を靴を泥んこにして歩き廻ることとなった。

《よしこれは俺の仕事だ。じゃあどうしたらいいんだ武田君》何時のまにか、さんが君になっていた。彼は学校の勤務の帰りには、必ず僕の机の前に現れるようになった。

あのことがあってから早くも四十年。加曾利貝塚公園は、大きな団地にかこまれて千葉市の中心地区の市民公園の一つになってしまった。そして今日に至っては昔の千葉の面影を残すものは全く皆無となってしまった。あのとき、もっと広く周辺の房総台地の景観を残そうと云う発想は全然なかった。まさか、周囲が今日のような状態になるとは予想もしなかった。

ともあれ。昔の千葉の姿は、古い昔の人の記憶の中にしか残っていない。そうして人達も、その記憶とともに消えゆく。むなしい。

武田さん、貴公のあの淋しげな微笑を思い出している……。

(元 千葉市教育委員会社会教育課長)